慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ブワイフ朝後期におけるイラクの政治変動 : al-Basasiri反乱の前史によせて
Sub Title	The political history of Iraq under the later Buwayhids : the preliminary note to the movement of al-Basasiri
Author	森川, 孝典(Morikawa, Takanori)
Publisher	三田史学会
Publication year	1983
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.52, No.3/4 (1983. 1) ,p.69(409)- 86(426)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19830100-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ブワイフ朝後期におけるイラクの政治変動

—al-Basāsīrī 反乱の前史によせて—

森川孝典

(一)

四四七年 Ramaḍān 月(西暦一〇五五年十一月)セルジューク朝スルタン・Ṭughrul-Bek(在位一〇三八—一〇六三)が、アッバース朝の都バグダードに入城し、ブワイフ朝(九三二—一〇六二)に代わって西アジアの支配者となった直後から四五一年 Dhū-l-Ḥijja 月(一〇六〇年一月)までの四年余の間、ファーティマ朝(九〇九—一一七一)の支援を受けた al-Basāsīrī の反乱が、シリア、イラクに展開されたことはよく知られている。

ところで従来この反乱については、セルジューク朝史研究の立場からは、西アジア支配を確立する上での試金石として位置付けられ[1]、ファーティマ朝史研究の立場からは、この反乱への財政的支援によって国家体制が揺らいでいくきっかけになったという解釈が与えられてきた[2]。それらはあくまで、反乱の四年余の出来事が各々の王朝史の推移の中でどのような意味を持っていたかを問題としているのであり、その事件の中心人物たちがどのような経緯を経て反乱に至ったのかほとんど触れられることがなかった[3]。

しかし、al-Basāsīrī の反乱が起きてくる政治的背景を探ることなくして反乱自体の評価を下すことはできない。反乱の中心人物である al-Basāsīrī はブワイフ朝のバグダード駐屯のトルコ軍人の隊長(muḳaddima)[4][5]であり、反乱に参加したのは主として al-Jazīra、al-'Iraḳ、Khūzistān のチグリス・ユーフラテス両河流域に勢力を張っていた土着の遊牧アラブであった。ブワイフ朝の版図は両河流域のほか、Fārs、Kirmān、Jibāl に及んでいたが、その広大な領土の中でチグリス・ユーフラテス両河流域に根を張るトルコ軍人と遊牧アラブが反乱の中核を占めたということは、この地域に反乱の背景となる独自の政治的展開があったことを予測させずにはおかない。よって本稿では、ブワイフ朝後期における両河流域の政治的展開をとくに反乱以前の al-Basāsīrī との関連で辿り[6]、それが反乱のいわば条件形成の過程であったこ

とだけを指摘し、反乱自体の展開、その評価・分析は別稿にて論じることにしたい。

(二)

反乱の背景を明らかにするために反乱の中心人物であった al-Basāsīrī が史料[7]でどのように現われてくるかをはじめに言及しておくことにしよう。彼の名が年代記に現われるのは四二四(一〇三三)年[8]のことであるが、翌四二五年にはバグダードの西部地区の ḥimāya(保護権)[9]を与えられている[10]。彼は Bahā' al-Daula(三七九―四〇三/九八九―一〇一二)[11]配下のマムルークであったと言われ、またブワイフ朝の末期には、後述する如く、大アミールとカリフの権力をも左右する権勢をふるった。

ところで、Bahā' al-Daula の時代といえば、彼の治世を境にしてブワイフ朝の統一的支配体制が崩壊し始め、その後ブワイフ朝の領土はブワイフ家の王位僭称者によって分割統治されていく時期に相当する。このような分裂・衰退期に al-Basāsīrī の権力が強大化し始めたとすれば、彼がまだマムルークであった時代の情勢から問き起こす必要があろう。そこでまず、彼がマムルークとして配属されたと思われる Bahā' al-Daula 時代およびその後のイラクとバグダードの政治情勢から辿って行くことにする。

さて、Bahā' al-Daula はブワイフ朝の大アミールの慣例に倣い、バグダードには本拠を置かず、イラク州(Wilāya al-'Irāḳ)には総督(nā'ib)を派遣して統治する体制をとった。その総督の下にダイラム人とトルコ人からなる兵隊が駐屯しており、数は後

者がまさっていた[12]。総督の任務はバグダードの治安維持、イラク一帯のアラブ、クルドの遊牧民勢力の監視であった。当時すでにアラブ、クルド系の遊牧民はその支配領域の徴税請負(ḍamān)を委されており、部族によっては ḥimāya(保護権)あるいは iḳṭā' を与えられていた。彼らは総督による支配の虚を巧みについて自らの権益を拡大しようとし、バグダードの総督軍と衝突する事件を度々起していた。

例えば、イブヌル・アスィールによると三八六(九九六)年、モスルに根拠地を有するウカイル族の族長 al-Muḳallad はイラクの Gharbī al-Furāt の ḥimāya を委任されており[13]、バグダードに彼の代理人(nā'ib)を置いていた。代理人は力が弱く、Bahā' al-Daula の部下と彼との間にいさかいが起こると、代理人は al-Muḳallad に書状を送り、不満を述べたので al-Muḳallad は軍を率いてモスルからバグダードに向かってきて、それに対抗しようとした Bahā' al-Daula の軍を敗走させた。その時 al-Muḳallad は、Ḳaṣr Ibn Hubayra 一帯の納税請負人の不在に目をつけ、丁度 Bahā' al-Daula が兄弟の軍と戦っている間隙をついてその地域一帯を掠奪してしまった。

これに対し、イラク総督の Abū 'Alī b. Ismā'īl は al-Muḳallad に戦いを挑んだ。しかし、al-Muḳallad の部下がバグダードに攻めて来るという報を聞き、Bahā' al-Daula はバグダードに Abū Ja'far al-Ḥujjāj を派遣し、al-Muḳallad と和を結ぶよう命じた。そして、al-Muḳallad が Bahā' al-Daula に一万 dīnār を納め、Bahā' al-Daula のあとに総督の Abū Ja'far al-

Ḥujjāj の名をフトバにおいて読み上げ、その代わり、al-Muḳallad には権威の着衣（al-khila' al-sulṭāniyya）と Ḥusām al-Daula（国家の剣）の称号を授け、モスル、クーファ、カスル・イブン・フバイラ、ジャーミアイン（Jāmi'ayn）をイクターとすることを条件に、事態が収拾された。しかし、彼は請負税を納める以外は何の義務も果たさず、地方役人（mutaṣarrifūn）さえ従わせて私的権力の拡大につとめたという。[14]

同じくイブヌル・アスィールによれば、三九二（一〇〇一―一〇〇二）年に al-Muḳallad を継いでウカイル族の族長になった Ḳirwāsh は兵を率いて al-Madā'in を攻囲した。イラク総督 Abū Ja'far al-Ḥujjāj はそれに対して軍を派遣し、それを阻止した。ところが、ウカイル族はクーファ近郊に勢力を持つマズヤド族の Abū al-Ḥasan 'Alī b. Mazyad と同盟を結び、シリアの Khafāja 族[15]を味方にひき入れた Abū Ja'far al-Ḥujjāj の軍と Ramaḍān 月（一〇〇二年七月）、Akram で戦いを交えた。後者の率いるダイラム、トルコ系兵士が敗れ、捕虜としてその多数を拉致された。Abū Ja'far al-Ḥujjāj はすぐ手勢を集めて体制を立て直してウカイル族とマズヤド族の族長 'Alī のもとに向かい、ようやく彼らを征圧し、マズヤド族の領地では金品を略奪したという。[16]

この他、四〇二（一〇一一―一〇一二）年、アカバで Khafāja 族が巡礼者を襲撃したという知らせが入った時、ブワイフ朝の宰相 Fakhr al-Mulk はマズヤド族の 'Alī に命令を出してその Khafāja 族を追跡させ彼らに巡礼者の復讐をさせた。[18] これに対し四〇三年、大アミールの Sulṭān al-Daula は 'Alī に名誉の着衣を与えている。[19]

以上見てきたように、遊牧アラブのブワイフ朝体制から離反する動きに対してイラク州のブワイフ朝総督は、支配の秩序を保つために、遊牧アラブに対しては褒賞と懲罰とによって臨み、それとともにイラク州に駐留する軍隊の維持になお一層努めたのであった。

ところで、ブワイフ朝大アミールの Bahā' al-Daula は、イラク州の治安が悪化するとすぐに別の総督を派遣して、イラク州の治安回復をはかるという政策をとったので、新旧の総督同士の反目が発生し、これがこの地域の政情不安を倍加させた。

三九三（一〇〇二―一〇〇三）年、総督の任を解かれた Abū Ja'far al-Ḥujjāj は、新任の総督 'Amīd al-Juyūsh Abū 'Alī の支配に反発して、ダイラム系、トルコ系軍人、ハファージャ族と連合して、新総督のイラク州への赴任を阻止する戦いを起こした。この戦いには遊牧アラブのウカイル族、ハファージャ族、アサド族[20]も戦闘に巻き込まれたと言われる。[21]

また、三九七（一〇〇六―一〇〇七）年になって再び両者の間に戦闘が開始された。この時 Abū Ja'far al-Ḥujjāj はホラーサン街道[22]の ḥimāya 保持者で、イラク州の新総督 Abū 'Alī と犬猿の仲であった Ḳalj のところに身を寄せていたが、この年 Ḳalj が死ぬと、Abū 'Alī はホラーサン街道の ḥimāya をクルド族の Abū al-Fatḥ b. 'Annāz に与えた。この措置を心よく思わぬ同じクルドの有力族長で、Abū al-Fatḥ b. 'Annāz の仇敵である

Badr b. Hasanwayh は、Abū Ja'far に助けを求め、Hindī b. Sa'dī、Abū 'Īsā Shādī b. Muḥammad、Warrām b. Muḥammad 等のクルド族と連合してバグダードに進軍した。これには遊牧アラブのマズヤド族の 'Alī も加わり、その総勢は騎兵一万人以上にのぼった。

この時、イラク総督 Abū 'Alī al-Ḥujjāj は Bahā' al-Daula に従ってイラクの低湿地帯（al-Baṭīḥa）の支配者 Abū 'Abbās b. Wāsil 討伐のため転戦中であったが、バグダードに攻め込んできた Abū Ja'far の大軍に対しては、バグダード駐屯のトルコ軍人とクルドの族長 Abū al-Fatḥ b. 'Annāz の抗戦によってかろうじて防衛することができたのである。[23]

以上述べてきたことから分るように Bahā' al-Daula 治下におけるイラク社会は、遊牧アラブの自立化の動きと支配者上層部の派閥抗争とによって政治的に混乱していたが、この状況はアッバース朝の都のバグダードにおいて端的にあらわれていた。次にこの点について触れることにしよう。

バグダードにはブワイフ朝の支配にとって様々の不安定要素があった。まず、ブワイフ朝は十二イマーム派のシーア派政権であったが、自らのイマームはこの世から姿を隠していると教義的に考えていたので、アッバース朝のカリフの存在を政治的に認め、彼を頂点とするスンニー派集団と共存していかなければならなかった。

しかし当然のことながらブワイフ朝はシーア派優先の政策を展開した。例えば、シーア派の大商人を優偶し、少数であるシーア派をスンニー派から守るため naḳīb という職を設けた。[24] また、正統派のカリフを誹謗する詩をスンニー派の家に掲げさせ、預言者マホメットの孫 Ḥusayn がイラクのカルバラーで殉教した命日 Muḥarram 月十日に殉教祭を実施した。[25]

これらの政策がスンニー派の感情を刺激し、事あるごとに両者は激しく対立した。チグリス河を挟んで西側の al-Karkh 地区のシーア派教徒と、東側の Bāb al-Ṭāḳ 地区のスンニー派の争いがとくに激しかった。

ところで、ブワイフ朝のトルコ軍人は、彼らの待遇の改善を要求してしばしば大アミール、あるいは総督に強訴を繰り返していたが、彼らが任務を放棄するとバグダード市民のあいだでシーア・スンニー派間の闘争が再燃し、無頼の徒（ayyārūn）がこれにともなってバグダード市街のあちこちにはびこった。とくに総督不在の時に彼らの悪事が街を支配した。その混乱収拾のために大アミールは強力な総督を派遣しなければならず、それを街の指導的人物はとくに願っていた。[26] ただ、総督たちは任期が短いせいもあって、なかには街の混乱を根本的に立て直そうと努力する代わりに私腹を肥やす者も多かった。Bahā' al-Daula を継いで大アミール位に就いた Sulṭān al-Daula（在位四〇三―四一二／一〇一二―一〇二一）は、四〇六（一〇一五）年バグダード総督 Fakhr al-Mulk[27] を捕え後任に Abū Muḥammad al-Ḥasan b. Sahlān を任命した。しかし、四〇八（一〇一七）年には総督の後楯となっていたダイラム人兵士たちが、ワースィトに遁走してしまうと、総督の権威は失墜し再び街は混乱した。これをみかね

た Sulṭān al-Daula は自らバグダードに乗り込んできたが、それをみた総督の Ibn Sahlān はウカイル族の族長 Ḳirwāsh の下に逃走した。しかたなく、Sulṭān al-Daula は Abū al-Ḳāsim Ja'far b. Abī al-Faraj b. Fasānjis をバグダード総督に任命した。これによって再びバグダードは内戦が激しくなり、ブワイフ朝の Sulṭān al-Daula は、「イラクの支配は独裁的で残忍な人物が必要である。Ibn Sahlān の他に適任者はいない。」という部下の言を受け入れ、再び彼を総督に任命した。[28]

Ibn Sahlān がバグダードに到着すると、無頼の徒は退散した。彼はまず、アッバース家の一団を追放し、それに合わせてシーア派の fakīh（法学者）である Abū 'Abd Allāh b. al-Nu'mān を追放し、不満分子を排除した。そしてダイラム兵を、シーア派の地区、スンニー派地区の双方に駐屯させ、ダイラム兵の権威を復活しようとした。他方、スンニー派の不満分子とトルコ軍人には冷淡な態度で臨んだ。これに怒ったトルコ軍人はワースイトにいたブワイフ朝の Sulṭān al-Daula に事態の収拾を求め、その結果 Sulṭān al-Daula 自身がバグダードに赴き、事態を正常化することになった。[29]

こうして Ibn Sahlān は追放され、それ以降、ブワイフ朝の大アミールがバグダードに本拠をおいて両河流域を直接統治することになっていった。この支配体制成立の背後にトルコ軍人の意志が強く働いていた事は見逃せない。彼らの生存は実にこの支配体制の存続如何に関わっていたのである。

（三）

ブワイフ朝の大アミールの直接統治が行われるようになったころの両河流域は、遊牧アラブが除々に自らの権益を拡大していく一方、バグダードに駐屯するトルコ軍人もしだいにその勢力を伸長させていく時期にあたっていた。

さて、Sulṭān al-Daula がバグダードに居を移すようになっても、トルコ軍人のブワイフ朝前期から続いている俸給の遅配等の窮状は打開されなかった。四一一年 Dhū-l-Ḥijja 月（一〇二一年三月）、トルコ軍人は Sulṭān al-Daula に強訴し、彼の弟 al-Ḥasan (Musharrif al-Daula) の大アミール位擁立を要求して、Sulṭān al-Daula を捕えようとした。Sulṭān al-Daula はそれを恐れワースイトに避難しようとしたが、トルコ軍人は依然として Musharrif al-Daula を大アミールに就任させようとした。やむなく、Sulṭān al-Daula は Musharrif al-Daula を一応イラクの支配者として認め、自らはファールスに引き込んだ。[30] そして、四一二（一〇二二）年バグダードで Musharrif al-Daula のフトバが読みあげられ、[31] 四一三（一〇二三）年には両者の間で、Sulṭān al-Daula がファールスとキルマーンを領有し、Musharrif al-Daula がイラクを支配し、大アミールになる取り決めが交されたのである。[32]

こうして、この頃大アミール位をめぐるブワイフ朝の政治力学は、バグダードに駐屯するトルコ軍人の存在を無視して考えられなくなり、バグダードはブワイフ朝の辺境から一転して目まぐる

しく動く政局の中心になっていった。

ところで、以上のようにトルコ軍人はブワイフ朝の大アミールに対して政治的影響力を強めていく一方、スンニー派のカリフとの関係も強めていくことになる。

四一五（一〇二四）年、四一六（一〇二五）年、Sulṭān al-Daula、大アミールの Musharrif al-Daula と相次いで死去するが、この時、大アミールの後継者問題が出てくることになった。候補者として、第六代の大アミール Bahā' al-Daula の子 Jalāl al-Daula と Ḳawām al-Daula そして第七代の大アミール・Sulṭān al-Daula の十七才になる子 Abū Kālijār の三人が挙がった。

当初、バスラの支配者であった一番年長の Jalāl al-Daula が大アミールに選ばれたが、彼の手元には軍人に振舞う金がなかった。そのため軍人たちはもう一人の候補者であった Abū Kālijār の懐をあてにして、彼を支援すると言い出し、カリフ al-Ḳādir（三八一―四二二／九九一―一〇三一）に大アミールの Jalāl al-Daula について讒言した。そして代りに、Abū Kālijār を大アミールに推輓したのである。(33)

ところが、かように Abū Kālijār はカリフとトルコ軍人とによって大アミールの地位を約束されたにもかかわらず、当時彼はファールスの領有権をめぐって伯父の Ḳawām al-Daula と交戦中であり、バグダード上京を果たすことができなかった。(34)

かくして、バグダードにはブワイフ朝の大アミールの不在という変則的な事態が生じた。このため、バグダード市内には強盗が出没し、民衆の反乱が起こり、その周辺部には遊牧アラブとクルド族が押し寄せる事態にまでなっていた。

これを憂慮したトルコ軍人の隊長たちは、この状態が長びけばますます兵士が無規律になるのを避けられないと考え、四一八年 Rabī' II 月（一〇二七年五月）、再び彼らはカリフの宮殿に乗り込み、「汝は万事の主（mālik umūr）」とカリフを持ち上げ、事態の切迫したさまを訴え、Jalāl al-Daula に再び大アミール位を授けブワイフ朝体制の立直しをはかった。カリフ al-Ḳādir は、「汝らは、我ら国家の子（abnā' daulatinā）」と言って彼らの要求を受け入れ、Jalāl al-Daula の大アミール位を再び承認した。(35)

以上から明らかなごとく大アミールによるブワイフ朝の支配体制はトルコ軍人の軍事力とそれと結ぶカリフ権とによって完全に形骸化し、この結果、政治秩序が乱れたバグダードに「トルコ軍人の隊長」としての al-Basāsīrī が出現してくることになるのである。

さて、ブワイフ朝後期においてバグダードの財政は慢性的な赤字状態を続け、大アミールの交替によってもそれを回復することはできなかった。このため市の行政は麻痺し、四二二（一〇三〇）年から四二五（一〇三三）年にかけて、イブヌル・ジャウジーによればついに盗賊がバグダードの街を支配したと言われる。(36) 租税と人頭税の徴収が彼らに委ねられ、バグダード周辺の土地はすべてイクターとして、トルコ軍人と官僚に与えられたのであった。(37)

要するに大アミールに残された権威はフトバを読みあげるだけになっていた。

街の混乱を収束する術をカリフはもたず、今やバグダードの内外は無法状態に陥ち入ってしまった。このような状態の中から四二五（一〇三四）年 al-Basasiri はバグダードの西部地区の ḥimāya を下賜され、歴史の舞台に登場してくることになる。イブヌル・アスィールは次のように述べている。[38]

「この年、al-Basāsīrī はバグダードの西部地区の ḥimāya を与えられた。それは無頼の徒（ayyārūn）が凶悪化し、悪事を激しく働き、それに対して大アミールの代理は何もすることができなかったので、al-Basāsīrī がその能力と技量を見込まれて任命されたのである。」

以上の記事からブワイフ朝の大アミールの権威失墜に伴い、それに連らなる行政・統治機構が崩壊し、それらの諸権限が、武力を背景に持つトルコ軍人の隊長としての al-Basāsīrī のような人物に移譲されていくさまを読みとることができる。彼はこの ḥimāya を足場に単なる軍隊の指揮者という立場を超え、強大な権力をもつ勢力家にのし上がっていったと思われる。

ここで話を転じて al-Basāsīrī が ḥimāya をバグダードにおいて獲得した前後の両河流域全体の遊牧アラブの情勢について触れておこう。遊牧アラブの諸部族はバグダードの Jalāl al-Daula 政権が al-Basāsīrī に ḥimāya を授与したことによって権威を失いつつある状況のなかで、力によって新たな均衡を生み出そうと模索していた。

さて、両河流域の北部 al-Jazīra のモスルにはウカイル族が強勢を誇っていたが、かれらは al-Basāsīrī が四二五年に ḥimāya を与えられた時期より大部以前から南進の動きを見せ、al-ʿIrāḳ に拠る部族勢力と抗争に発展するケースが多くなっていた。これをイブヌル・アスィールによってみてみることにしよう。

四一一年 Rabīʿ I 月（一〇二〇年六月）、ウカイル族の族長 Ḳirwāsh と Rāfiʿ b. al-Ḥusayn の連合軍は、マズヤド族の Dubays、バグダードに駐屯する軍隊、そしてもとはウカイル族に属していたが、叛いて Ḳirwāsh のもとを去っていた Gharib b. Maʿan の軍と干戈を交えた。この戦いにおいて Ḳirwāsh の一派は敗れて捕虜となり、Ḳirwāsh の財宝と家財が奪われた。Rāfiʿ b. al-Ḥusayn は Gharib b. Maʿan に保護を求めて行き、Gharib 等の軍はタクリートを武力征服し、バグダード駐留の軍隊は、バグダードに帰った。この後、Ḳirwāsh は釈放されるや今度は Khafāja 族の族長 Sulṭān b. al-Ḥusayn b. Thimāl と連合するために彼のところへ向かったが、トルコ軍人の一団の追撃をうけ、Ḳirwāsh は二度目の敗北を喫した。この間にブワイフ朝の大アミールの代理（nāʾib）は Ḳirwāsh の所有地となっていた Gharbi al-Furāt を奪った。[39]

さらに四一七（一〇二六）年、ハファージャ族がサワードの Ḳirwāsh の領地に侵入すると、Ḳirwāsh はハファージャ族、マズヤド族の Dubays、バグダードに駐留する軍隊の連合軍と戦い、この結果 Ḳirwāsh はクーファの領有権を喪失し、さらにバグダード西部の Anbār も奪われた。[40] こうしてウカイル族の南進に対し、al-ʿIrāḳ に拠る諸部族は結束してそれを阻止し、逆に攻勢に転じた。

ところで、かつて Jalāl al-Daula と大アミール の地位を争い、今はフージスターンに勢力を張っていたブワイフ家の Abū Kālijār は両河流域に進出する機会を狙っていたが、マズヤド族の Dubays の誘いをうけてこの地域に進軍した。彼はフージスターンからワースィトに進み、ここを征服、この後、モスルに拠るウカイル族の Ḳirwāsh に使者を送り、バグダードの大アミール Jalāl al-Daula を挟撃することを提案した。しかし、この計画もガズニ朝の Maḥmūd が西進してくるという急報が入り、Abū Kālijār はフージスシーンに引返さなければならなくなって、頓座した。[41] バグダード挟撃の同盟を呼びかけられたマズヤド族の Dubays にはハファージャ族に攻撃される脅威が迫っており、[42] またウカイル族の Ḳirwāsh にはトルコマーン遊牧民のオグーズ族のモスルへの侵入があったりして、[43] 結局、外からの脅威によって Jalāl al-Daula のバグダード政権はあやうく窮地を脱して、まがりなりにも政権を延命させることができた。むしろ、Jalāl al-Daula はこの政治的空白を利用してクルド族の領主 Abū al-Shauk と同盟して南部イラクのワースィトを回復することができた。[44]

以上、イブヌル・アスィールにもとづいて両河流域の遊牧アラブの状況についてみてきたが、話を元に戻し、al-Basāsīrī がバグダードの ḥimāya を許された四二五年以降の Jalāl al-Daula の政権についてみてみることにしよう。

バグダードのトルコ軍人の利害から彼らに懇願されて大アミール位に就いた Jalāl al-Daula は、トルコ軍人の強訴を度重ねて受け、それに応えられないと命からがらバグダードから逃げ出すことを繰返していた。四二七（一〇三五―一〇三六）年、トルコ軍人に宮殿を略奪、侵入されると彼はカルフ地区に逃げ込み、さらにタクリートの Rāfi' b. al-Ḥusayn b. Maḳkan を頼って彼のところに身を寄せた。[45] また四三一（一〇三九―一〇四〇）年には、トルコ軍人が幕舎をバグダード郊外に移して各地で略奪を働いていたので、それを恐れてバグダードを離れようとした程であった。[46] しかし、前者の事件においては al-Ḳādir に次いでカリフ位にあつた al-Ḳā'im（四二二―四六七／一〇三一―一〇七五）が仲をとりもって無事帰還させ、後者の場合においては、マズヤド族の Dubays やウカイル族の Ḳirwāsh と協定（ḳawā'id）を結び、その援軍によってバグダードにとどまることができた。Jalāl al-Daula とトルコ軍人たちとの関係は、旧に復することが不可能なほど悪化していたと言われるが、al-Basārīrī を初めとするトルコ軍人の指導層は、それでも敢て Jalāl al-Daula に代えて Abū kālijār を大アミールに据えることをカリフに建議しようとはしなかった。その理由は、大アミールをすげ替えたところで政治の混乱を収拾できると思えなかったからである。むしろ Jalāl al-Daula をとにかくも支援し、その支配領域をまがりなりにも守っていこうと考えていた。四二八（一〇三七）年の Bārāstughān による、六カ月に及ぶバグダード占拠事件[47] はそのことを端的に示している。以下、この事件についてイブヌル・アスィールに拠って述べてみよう。

Bārāstughān は ḥājib al-ḥujjāb という軍隊の司令官であ

ったが、Jalāl al-Daula にトルコ軍人の管理の悪さを責められ、また、トルコ軍人には俸給着服の疑いをかけられたことが原因して、恐れをなしてカリフの宮殿に避難した。その後彼は Abū Kālijār と密かに連絡をとり、その援助を求めた。Abū Kālijār の援軍とそれに呼応したワースィト軍は、当時ワースィトの総督であった Jalāl al-Daula の子 al-Malik al-'Azīz を追放した。その戦果を聞いた Bārāstughān は、自信を深めて Jalāl al-Daula に宣戦を布告し、Jalāl al-Daula をバグダードから追放することに成功した。Jalāl al-Daula はバグダード北方の Awānā に逃れて行ったが、この時、al-Basāsīrī が随行していった。

さて、バグダードにおいて、Bārāstughān はカリフに Abū Kālijār に対してフトバを読みあげることを要求して、新しい大アミールであることを公けの場で認知させようと画策したが、断われ、ハティーブにそれを無理やり読み上げさせた。かくするうちに、Jalāl al-Daula が彼を支持するウカイル族の Ḳirwāsh、マズヤド族の Dubays、トルコ軍人の隊長 al-Basāsīrī を従えて、バグダードに戻り、西部地区に陣した。東部地区には Abū Kālijār を大アミールにかつごうとする Bārāstughān が、Abū Kāligār の盟友 Abū al-Shauk、Abū al-Fawāris Manṣūr b. Ḥusayn を従えて陣取り、双方がにらみ合う状態になった。Bārāstughān のもとに、Abū Kālijār のイランへの帰還の知らせが入ると、彼の援護に来ていたダイラム兵が戦列を離れはじめ、彼の勢力は弱まってバグダードからワースィトに落ちのびていった。Jalāl al-Daula は al-Basāsīrī に命令を下して追撃させ自らも Dubays と共に進軍した。ワースィトの北方のチグリス河畔の村 al-Khayzrāniyya で追いついた彼らは、Bārāstughān と戦い、彼が落馬したところを取り押さえ、斬殺した。この Bārāstughān の事件で明らかなことは、Jalāl al-Daula の政権をかろうじて支えたのが、al-Basāsīrī に代表されるトルコ軍人であり、Ḳirwāsh（ウカイル族）、Dubays（マズヤド族）という有力な遊牧アラブの族長クラスであったりして、この頃になると、後者の例から明らかなように、Jalāl al-Daula の政権はイラクの土着の諸勢力との連携も深めるようになっていた。

彼らと Jalāl al-Daula 政権との結びつきの例は他にも指摘できる。例えばタクリートの Maḳkan 家の Gharib b. Muḥammad は死亡した時五〇万 dīnār 以上の財産を残した資産家であったが[48]、そのマカン家に属する Rāfi' を頼って四二七（一〇三六）年、Jalāl al-Daula は既述のようにバグダードを追放された時身を寄せ[49]、Rāfi' が死亡して甥の Khamis b. Tha'laba が跡を継ぐと、Jalāl al-Daula は八万 dīnār の献金を受け、その金で軍隊の正常化をはかったという[50]。かくして、彼は shā han shāh[51] という称号以外すべての権利を奪われたにもかかわらず、長命の政権を一応維持することができたのである。

ただし、ウカイル族の Ḳirwāsh との関係はその後悪化した。Ḳirwāsh は四三一（一〇三九―一〇四〇）年、同族の Khamis が支配するタクリートに勢力を伸張しようとし[52]、翌年、バグダードのトルコ軍人に Jalāl al-Daula の支配を覆すよう唆した。Jalāl al-Daula はこの動きをいち早く察知して、al-Basāsīrī を

指揮官に任じ、討伐軍を派遣した。それはバグダード近村の al-Sindiya にいた Ḳirwāsh の代官を捕えようというものであったが、ウカイル系のアラブに前進を遮られ、al-Basāsiri は目的地にまで行けなかった。それどころか Ḳirwāsh は途中待伏せて、トルコ軍人の司令官を何人か殺し、死体をバグダードに送りつけた。

Jalāl al-Daula は軍を集め、アンバールに親征して、Ḳirwāsh がイラクに保有していたイクターを取り上げる対抗措置をとった、しかし、アンバールにおいて軍馬のための飼い葉が不足し、そのためアンバールよりさらに北方の al-Hadītha まで調達しに行ったところをウカイル族に襲撃され、運搬用の馬を奪われた。再三の攻撃に対して親征軍は、調達の隊長 al-Murshid Abū al-Wafā' がわずかの手勢で奮戦することができただけであった。(53)

以上、遊牧アラブの Jalāl al-Daula に対する関係は叛服ままならないところがあり、この故にバグダードの Jalāl al-Daula の政権は、al-Basāsīrī 以下のトルコ軍人に依存する途しか残されていなかったのである。

さて、四三五年 Sha'bān 月（一〇四四年三月）Jalāl al-Daula が病死すると、バグダードの駐留軍はワースィトにいた彼の長子 al-Malik al-'Azīz に彼らの帰順の意を認めた書を送り、それに応えて宣誓料（ḥaḳḳ al-bay'a）を急いで用意するよう求めた。このためその額について何度か書が往復し交渉された。彼がそれに二の足を踏んでいると、Abū Kālijār はすかさず手を回して軍の司令官と軍隊に書を送り、宣誓料の用立てを申し入れて彼らの歓心を買おうとした。(54) al-Malik al-'Azīz は、自らの軍隊に裏切られ、マズヤド族の Dubays、ウカイル族の Ḳirwāsh、最後にすでにイランに侵入していたセルジューク朝の Ṭughrul-Bek の弟 Ibrāhīm Yannāl にも頼ったが、いずれも支持をとり付けられなかった。(55)

こうして、Abū Kālijār は、彼の声威が認められるまでバグダードの軍隊にくり返し使者を送り、ついに四三六年 Ṣafar 月（一〇四四年八―九月）、バグダードで彼のためにフトバが読みあげられた。かくして、Abū Kālijār は宣誓料を送り、バグダードの軍隊とその子供達に分配した。また彼はカリフの al-Ḳā'im に対し、一万 dīnār と多数の贈り物を送った。アンナーズ族の Abū al-Shauk、マズヤド族の Dubays、Diyār Bakr の Naṣr al-Daula b. Marwān も彼のためにフトバを読み上げた。カリフは Muhyī al-Dīn（宗教を甦らせる人）と彼を呼んだ。彼はわずか百人の騎兵を引きつれただけで、同年 Ramaḍān 月（一〇四五年三月）バグダードに入り、軍隊の隊長 al-Basāsīrī、al-Nishawūrī、al-Humām al-Liḳā' に名着の着衣を与えた。(57) Abū Kālijār はここに、カリフ、バグダードの軍隊、さらにイラク土着の遊牧アラブの承認を受けて念願の大アミール位に就任することになった。

（四）

最後にセルジューク朝の西進とイラク社会の変動について触れておこう。さて、トルコマン遊牧民のオグーズ族の一部は既に述

べたように、イラク北境からモスル周辺を脅やかしていたが、Tughrul-Bek 率いるセルジューク朝の本隊はイラン方面からイラクに侵略すべく着々とその態勢を整えていた。すなわち、四二九（一〇三七）年に Naysābūr[58]、四三三（一〇四一―一〇四二）年に Jurjān と Tabaristān[59]、翌年、al-Rayy と al-Jabal 地方の征服を完了し[60]、イラク突入の機会をうかがっていた。

この動きを知った Jalāl al-Daula 未期のブワイフ朝治下のイラクはにわかに浮足立った。まず、カリフの al-Ḳā'im は自ら調停役を買って出て、セルジューク朝の Tughrul-Bek と大アミールの Jalāl al-Daula、当時まだイランに拠っていた Abū Kālijār 三者が和平を結び、即時、略奪、殺人、破壊を停止するよう呼びかけた[61]。ところが、カリフは逆に彼の収入源であった人頭税（al-jawālī）の徴収権をブワイフ朝の大アミールの Jalāl al-Daula から差止められ[62]、バグダードにおける聖俗両首脳の乖離が決定的となった。

こうする間にセルジューク朝の軍隊はブワイフ朝の領内に迫り、四三七（一〇四五―一〇四六）年、前衛部隊を率いる Ibrāhīm Yannal がまず Ḥulwān に突入し、この町を略奪破壊した。Jalāl al-Daula の歿後大アミールに就き、その時たまたま、フージスターンに滞留中であった Abū Kālijār は、これを聞いてセルジューク朝の軍隊を迎え討つべく進軍を決意したが、疫病で一万二千頭もの軍馬が斃死したために[64]、それを果たせず、結局、彼は Tughrul-Bek に和平を請うて、ひとまず難局を切りぬけようとはかった。この結果、Tughrul-Bek と Abū Kālijār の娘、Abū Kālijār の子 Abū Manṣūr と Tughrul-Bek の兄 Dā'ud の娘との二組の婚姻がかわされた[65]。

他方、Ibrāhīm Yannal の軍隊がバグダードを目ざしているという報が届くと、人々は驚愕し、Abū Kālijār の子 Abū Manṣūr の下に集まり、Ibrāhīm Yannāl の軍隊の侵入を阻止することに決定した。ところが、実際に阻止のために出軍したのは Abū Manṣūr と宰相が率いるわずかの手勢の軍にすぎず、国境防衛は実効があがらず、ホラーサーン街道はバグダードに逃れてくる避難民で溢れた[66]。Tughrul-Bek と和平を結んだあとの Abū Kālijār はなおも兵を集め、国境付近の警戒をゆるめなかったが、フルワーンへ進軍したバグダードの軍隊はセルジューク朝の Ibrāhīm Yannāl の軍隊に敗北を喫し、フルワーン領主 Muhalhil は一族を引き連れてバグダードに難を逃れたという[67]。

この後、セルジューク朝の軍隊の鉾先はビザンツ領へ向い[68]、ブワイフ朝治下のイラクはしばらくの間彼らの侵略から解放された。しかし、その小康の間にもイラクの社会では、王朝末期の兄弟間の内訌、ブワイフ朝後期の王権を支えていた諸勢力の離反がはじまっていた。以下、それについて述べよう。

セルジューク朝軍の侵入阻止に努めた大アミール Abū Kālijār が四四〇年 Jumādā II 月（一〇四八年十月）に歿すると、彼の子の Abū Naṣr Khurrāh Fīrūz が大アミールに就任し、al-Malik al-Raḥīm と名のった。この時ブワイフ朝の支配領域は、イラク、フージスターン、ファールスに狭められていた[69]。その中で、イラン・イラクの国境では、クルド族と遊牧アラブが略奪を

恣いままにし始め、ファールスでは al-Malik al-Raḥīm の弟の Abū Manṣūr Fulād Sutūn が領有権を主張し、バスラでも同じく弟の Abū ʻAlī が支配をゆずらなかった。大アミールの al-Malik al-Raḥīm はそれらの征圧に気を奪われて、イラクの政情を返りみるひまはなく、イラク一帯の混乱が一層進行した。

四四一（一〇四九―一〇五〇）年、ウカイル族がイラク南部に攻め入り、al-Basāsīrī のイクターであった Balad al-ʻAjam、Bādūrayā を略奪した。その時 al-Basāsīrī は大アミールの al-Malik al-Raḥīm に同行しイラン遠征中であったが、それを聞いて直ちに引返した。[70] 同年 Shaʻbān 月（一〇五〇年一―二月）、al-Basāsīrī はバグダードからホラーサーン街道に兵を進め、かつてクルド族の Abū al-Shauk が支配していた al-Dazdār 地方を征服し、戦利品を奪った。[71] 同じく Dhū-l-Ḳaʻda 月（一〇五〇年三―四月）にはアンバールの町において乱暴狼藉を働くウカイル族の Ḳirwāsh の行状を訴えてきた住民に対して、al-Basāsīrī は軍隊を送り、自らもそこに赴いて事態の正常化に努めた。[72] また四四五年 Shawwāl 月（一〇五四年一月）、領内のあちこちを荒し回るクルド族と遊牧アラブの一団に対して、al-Basāsīrī は al-Bawāzīj において彼らを強襲し、戦利品を得た。[73] al-Basāsīrī は、かくしてバグダード周辺地域の治安を以上のように維持しながら、自ら率いる軍隊の糧食を確保していたと思われる。

バグダードの町においては暴動が多発し、脱出者があいつぐようになっていた。四四五（一〇五三）年のバグダードは不正が町にはびこり、大アミールの支配はあって無きが如き状態になっていた。かくするうちにトルコ軍人は暴徒化し、町はいっそう混乱したので、トルコ軍人の隊長たちが取り締まりを始めた。彼らがカルフ地区のシーア派教徒を殺し、これがきっかけとなってカルフ地区のシーア派教徒は立ちあがりトルコ軍人と戦闘になった。トルコ軍人の隊長たちは抑える力をもたず、カリフは不介入の立場で事の成行きを傍観していた。結局、トルコ軍人を民衆から遠ざけることで事態はようやく収拾された。[74] しかし、四四六年 Muḥarram 月（一〇五四年四月）、トルコ軍人は俸給が遅配したことに怒って、またもや騒ぎを起し、武器をとってカリフにその不満をぶちまけた。イブヌル・アスィールは次のように記している。すなわち

「俸給担当者はカリフ宮殿に住みつき、金を握っている。だから我々が彼らに俸給を要求しても、宰相とカリフがさえぎり、我々には手の出しようがない。我々は破滅してしまうばかりだ。」[75]

また、次のようにも強訴した。

「聖域の主とあろう者、我々を配下にとどめておこうとするなら我々の窮状をまず解決すべきだ」[76]

トルコ軍人はカリフとの間に以上のような押し問答を繰り返したが、満足のゆく解答が得られず、カリフの宮殿を襲撃するとおどした。トルコ軍人は市内の略奪に走り、逃げまどう人々を襲った。物価は高騰し、食品が不足した。事態を憂慮したカリフはトルコ軍人に書状を送り、次のように述べた。「我々は（俸給の担当者で今身を隠している）宰相を捜索し、彼の部下を捕えた。これ

が朕にできる最大限のことである。このまま内乱が続けば人々は破滅してしまう。それが汝らの希望なら朕らは街を去ることになろう。」このように彼らを諭し、わずかばかりの金を与え、給与問題で責任を問われた宰相の身柄を al-Basāsīrī に預けて、事態を一応おさめた。[77] al-Basāsīrī はこの後も自分の持金と家畜を売払った金を拠出して、トルコ軍人の俸給の不足分を補足し、役らを宥めようとした。

しかし、それにもかかわらずトルコ軍人は騒ぎと不正をやめず、そのため領内の警備はおろそかになり、クルド族と遊牧アラブの侵入と略奪は前にも増して激しくなった。この虚をついて、Ḳirwāsh に代ってウカイル族の族長になっていた Ḳuraysh b. Badrān 配下の者がモスルからティグリス河を下り、Baradān にあった Kāmil b. Muḥammad b. al-Musayyib の野営地を襲撃した。そこには al-Basāsīrī 所有の家畜、ラクダの群れも放牧されていたが、彼らはそれを残らず掠奪して去った。この事件を聞いたバグダードの住民は、これが引き金となってまたもや民衆の不満分子とトルコ軍人が暴動を起すのではないかと恐れたという。大アミールの威力はバグダードにおいて、全く地に落ちていた。[78]

また、同じ四四六年 Rajab 月（一〇五四年十月）、ハファージャ族がジャーミアインを襲い、マズヤド族の Dubays の領地を略奪した。するとマズヤド族は al-Basāsīrī に救援を頼み、[79] 彼らを敗走させた。しかし、その後もハファージャ族の侵入はやまなかったので、al-Basāsīrī は彼らを Khaffān で取抑え、その一部を殺し、金、らくだ、奴隷を奪った。彼はハファージャ族二十五人を引き連れてバグダードに帰り、彼らを殺してさらし首にした。[80]

同年 Sha'bān 月（十一月）、ウカイル族の Ḳuraysh がアンバールを攻囲占領し、彼の領地内でセルジューク朝の Ṭughrul-Bek を支配者と認めるフトバを読みあげた。そして al-Basāsīrī の所有物を略奪し、al-Khālis にあった彼の部下の野営地も略奪した。それに怒った al-Basāsīrī は大軍を率いてアンバール、Ḥarbā に進軍し、二つ町を取り返した。[81]

以上にみられるごとく、セルジューク朝軍のイラク侵入という緊急事態を前に、ブワイフ朝大アミールがイラン外征のためイラクの政務を怠たっている間、al-Basāsīrī は、バグダードの軍隊の管理をし、ウカイル族等の略奪を防ぎ、イラク一帯の治安を維持し、また徴税の任務まで果たし、大アミールの al-Malik al-Raḥīm になりかわって、全て自らが手腕を奮うようになっていった。そのため、彼のイラク一帯への声望は高まり、モスクから彼の名がフトバに読みあげられるほどになった。[82] 四四六年 Ramaḍān 月（一〇五四年十二月）、al-Basāsīrī は彼の領地を襲ったウカイル族の族長 Ḳuraysh の部下 al-Muḥallibān 家の Abū al-Ghanā'im と Abū Sa'd が秘かにバグダードに潜伏しているのを聞きつけると、al-Basāsīrī は彼の声望を嫉むカリフの宰相 Ibn al-Muslima（Ra'is al-Ru'asā'）[83] こそ al-Basāsīrī に対するウカイル族の攻撃を陰で糸を引く張本人であると考え始め、ウカイル族に襲撃されたハルバーの村を視察したあとでもその破壊

状況をカリフの宮殿には報告しなかった。

こうして al-Basāsīrī とカリフ、および彼の宰相 Ibn al-Muslima との関係が悪化し、その対立が表面化することになった。すなわち、Ibn al-Muslima の縁者の舟が al-Basāsīrī の家の近くを通り過ぎた時、彼はそれに停止を命じ、積荷に税を課した。また Ramaḍān 月から Dhū-l-Ḥijja 月まで、国庫からカリフに支給する年金を減額し、Ibn al-Muslima とその郎党の手当ても同様に減額する報復措置をとったのである。[84] さらに、al-Basāsīrī はアンバールへ侵入してきたウカイル系の al-Muḥallibān 家討伐に向かった。この作戦にはマズヤド族の Dubays も参加し、彼らはアンバールを攻囲して、破城槌を建てて城壁を破壊、Abū al-Ghanā'im、ハファージャ族五百人、住民五百人を捕虜にしてバグダードに拉致して、その大半を処刑した。[85]

かくして al-Basāsīrī はバグダードの北の玄関口ともいえるアンバールをウカイル族から死守することで、イラクの保全を確保することができたが、この事件によって、al-Basāsīrī とカリフとの関係は完全に亀裂が生じた。Ibn al-Muslima は al-Basāsīrī に対する憎しみからついに彼をブワイフ朝の政界から追放しようと画策するようになった。すなわち、バグダードでスンニー派の示威運動が高まった四四七年 Rabī' II 月（一〇五五年六―七月）、al-Basāsīrī の部下 Abū Sa'd al-Naṣrānī が六百個の酒壺を舟に乗せ、ワースィトにいた al-Basāsīrī のところに運ぼうとしていた。折しもそれを見た Ibn al-Muslima に組するハーシム家の者たちは、酒の運搬はイスラーム法で禁止されていることを楯にとり、壺を破壊して酒を全部流した。その知らせに驚愕した al-Basāsīrī は、その舟の所有者がキリスト教徒であることを理由に、その酒壺の破壊が不合法であるというハナフィー派法官の判決を得、Ibn al-Muslima と争そった。さらに、Ibn al-Muslima はバグダードのトルコ軍人に al-Basāsīrī を中傷し、彼らをたきつけてカリフの承認のもとに al-Basāsīrī の屋敷に放火させ全財産を没収した。

また、Ibn al-Muslima は al-Basāsīrī を口汚くののしり、ファーティマ朝のカリフ al-Mustanṣir と秘かに書をとり交していると誹謗して、al-Basāsīrī とバグダードのカリフとの仲を決定的に悪くした。この結果、カリフはブワイフ朝の大アミールの al-Malik al-Raḥīm に対し、彼の追放を命じたのである。[86] イブヌル・アスィールは Ibn al-Muslima が al-Basāsīrī をカリフから遠ざけ、ブワイフ朝の政界から追放したことが「Tughrul-Bek のイラク支配と、（ブワイフ朝の最後の大アミール）al-Malik al-Raḥīm の逮捕につながった最大の原因となった」と述べ、[87] セルジューク朝によるイラクの支配体制の確立がブワイフ朝末期の政権を事実上支えていた al-Basāsīrī の追放によって実現したと評価しているのである。

以上、筆者はブワイフ朝後期の大アミールの政権を支えてきたトルコ軍人の一人であった al-Basāsīrī について、遊牧アラブ、クルド、カリフとの関係から説いてきたが、al-Basāsīrī の権力がブワイフ朝後期のイラクの政治史の中で占める位置・大きさを不充分ながら明らかにすることができたと思う。この al-Basā-

sīrī は既述のように四四七（一〇五五）年、イラクの中央政界から追放され、その結果、同盟者のマズヤド族の Dubays を頼ってイラク南部に落ちのびていった。この al-Basāsīrī の中央政界での権力喪失の直後にイスラム世界最大の政治的変動が起った。それが同年 Ramaḍān 月（一〇五五年十一月）セルジューク朝のバグダード入城とスルタン制の創始であった。このことが四四八—四五一（一〇五六—一〇六〇）年において、ファーティマ朝の援助を受けた al-Basāsīrī の反乱を引き起こすことになるのである。この事件については次稿を期して、本稿ではその前史の叙述にとどめて筆を擱くことにする。

註

（1）例えば次の研究を見よ。Cl. Cahen, "Bagdād au temps de ses derniers Califes" in *Bagdād, volume spécial, publié à l'occasion du Mille deux Centième Anniversaire de Fondation* (Leiden, 1962), p. 293.

（2）例えば次の研究を見よ。A. Esmail and A. Nanji, "The Ismā'īlis in history," in *Ismā'īlī contributions to Islamic culture* (Tehran, 1977), p. 235; M. Canard, "al-Basāsīrī", in *Encyclopaedia of Islam*, new ed., pp. 1073–1075.

（3）他にこの運動を取り扱かっている研究として、G. Makdisi の *Ibn 'Aqīl et la résurgence de l'Islam traditionaliste au XIe siècle* (Damascus, 1963) がある。彼はブワイフ朝末期の政治を、カリフをめぐる、al-Basāsīrī、Tughrul-Bek そして有力遊牧勢力たちによる権力闘争と把えている。非常に示唆に富むが、その背景となる彼らの歴史的動行には触れていない。

（4）ブワイフ朝の軍隊については、C. E. Bosworth, "Military organization under the Būyids of Persia ana Iraq", *Oriens*, v. 18–19, (1965–66) と、清水宏祐「ブワイフ朝の軍隊」『史学雑誌』八一—三（昭和四七年）があるが、いずれも組織の研究であり、ブワイフ朝前期に限られている。

（5）年代記には mukaddima の表現は見あたらない。*Ibn khallikān* (I, 172–3) には次のように見える。

「Abū al-Ḥārith Arslān b. 'Abd Allāh al-Basāsīrī はトルコ人で、バグダードのトルコ兵士の隊長であった。彼は Bahā' al-Daula のマムルークであったといわれる。」

（6）ブワイフ朝の両河流域の政治あるいは社会の歴史的展開を辿ったものに例えば、H. Busse, *Chalif und Grosskönig. Die Buiden in Iraq* (Beirut, 1969); 佐藤次高①「イクター制成立史の研究—ブワイフ朝時代のイラクについて—」（『イスラム世界』十二、一九七七）、同②「イラク社会の変容とイクター制」（『東洋学報』六一—三・四、一九八〇）がある。

（7）本稿で使用したアラビア語資料は次の通りで、括弧内は略称である。

Ibn al-Athīr, *Kāmil fī Ta'rīkh*, 9v., Bayrut, 1978 (*Kāmil*)

Ibn al-Jauzī, *al-Muntaẓam fī Ta'rīkh al-Mulūk wal-Umam*, v. 5–10, Hayderābād, 1357–58H. (*Muntaẓam*)

Ibn Ḳalānisī, *Dhayl Ta'rīkh Dimashḳ*, *Bayrūt*, 1908. (*Ibn Ḳalānisī*)

Ibn Khaldūn, *Ta'rīkh al-'Alāma, Kitāb al-'Ibar*, 7v., Bayrūt, 1956–61. (*'Ibar*)

Ibn Khallikān, *Wafayāt al-A'yān*, 6v., al-Ḳāhira, 1948 (*Ibn Khallikān*)

al-Khaṭīb al-Baghdādī, *Ta'rīkh Baghdād*, 14v., Miṣr, 1931 (*Ta'rīkh Baghdād*)

(8) マズヤド族の Dubays と Thābit の兄弟争いに対し、al-Basāsīrī は後者に援軍を派遣したという。(*Kāmil*, VIII,7)

(9) 地域の公共の秩序を維持するための保護権。その保持者は一定の報酬 (rasm al-ḥimāya) を受けた。(Busse, op. cit., p. 323 および佐藤前掲論文①五八頁参照)

(10) *Kāmil*, VIII, 7.

(11) 前註(4)参照。

(12) *Kāmil*, VII, 139.

(13) 佐藤氏は「'Ayn al-Tamr や Qaṣr Maqātil を含むユーフラテスの西岸一帯をさした」と推定されている。(前掲論文①註九八)

(14) *Kāmil*, VII, 181-182.

(15) *Kāmil* には「彼らをシリアから呼び寄せた」(VII, 214) とあり、彼らはシリアにも存在していたと思われるが、後述の如く、ウカイル族と同族で、クーファ西部に中心勢力を持つアラブであった。

(16) *Ibid.*, 214.

(17) *Ibid.*, 254.

(18) *Ibid.*, 264.

(19) *Ibid.*, 268.

(20) クーファからバスラにかけて勢力をもつ大部族。マズヤド族はその一支族。

(21) *Kāmil*, VII, 216.

(22) バグダードから北へ抜け、ホラーサン地方に通ずる街道。

(23) *Kāmil*, VII, 232-233.

(24) R. Levy, A Baghdad chronicle, (Rhiladelphia, 1977) p. 161.

(25) *Ibid.*, p. 159.

(26) 四〇一(一〇一〇一一〇一一)年、イラク総督の 'Amīd al-Juyūsh が死去し、バグダードの街に混乱が生ずると、Bahā' al-Daula は Fakhr al-Mulk を任じたが、彼を出迎えたのは kuttāb (書記)、ḳuwwād (隊長)、a'yān nās (名士層) であった。(*Kāmil*, VII, 254)

(27) 彼は捕えられた時、奪った物と報告済みの物以外に、百万 dīnār の現金があったと言う。(*Kāmil*, VII, 279)

(28) *Ibid.*, 298.

(29) *Ibid.*, 300-301.

(30) *Ibid.*, 306.

(31) *Ibid.*, 309.

(32) *Ibid.*, 311-312.

(33) *Ibid.*, 322.

(34) *Ibid.*, 328.

(35) *Muntaẓam*, VIII, 29; *Kāmil*, VII, 229; 'Ibar, III, 927.

(36) *Muntaẓam*, VIII, 50.

(37) *Ibid.*, 60. に「この年、Jalāl al-Daula の王国 (mamlaka) はバグダード (al-Ḥaḍra) とワースィト、バティーハにあったが、彼にはフトバ以外に権利はなかった。徴税業務はアラブやクルドに分割され、その周辺はトルコ人や高級官僚の手に委ねられていた」とある。佐藤氏は「その周辺部」(al-atrāf minhā) の hā を王国とされた (前掲①論文、註四三) が、バ

ダードがふさわしいと思われる。

(38) *Kāmil*, VIII, 7.

(39) *Ibid.*, VII. 308.

(40) *Ibid.*, 325.

(41) Abū Kālījār は Jalāl al-Daula に休戦を申し出たが、彼はそれを受けつけなかった。(*Ibid.*, 336-337.)

(42) *Loc. cit.*

(43) Ḳirwāsh は Jalāl al-Daula あるいは Dubays 等の遊牧アラブ、クルドに応援を求めたが、Jalāl al-Daula はトルコ軍人離反のため援軍は送らなかった。(*Ibid.*, 342)

(44) *Ibid.*, 337.

(45) *Ibid.*, VIII, 10.

(46) *Ibid.*, 21.

(47) *Ibid.*, 13-14.

(48) *Ibid.*, 7.

(46) *Ibid.*, 10.

(50) *Ibid.*, 12.

(51) *Muntaẓam*, VIII, 97.

(52) *Kāmil*, VIII, 28.

(53) *Loc. cit.*

(54) *Ibid.*, 37.

(55) *Loc. cit.*

(56) *Ibid.*, 40.

(57) *Loc. cit.*

(58) *Ibid.*, 15.

(59) *Ibid.*, 30.

(60) *Ibid.*, 34.

(61) *Ibid.*, 39.

(62) *Ibid.*, 36.

(63) *Ibid.*, 41-42.

(64) *Loc. cit.*

(65) *Ibid.*, 44.

(66) *Ibid.*, 45.

(67) *Ibid.*, 47.

(68) *Ibid.*, 48.

(69) *Loc. cit.*

(70) *Ibid.*, 51.

(71) *Ibid.*, 53.

(72) *Loc. cit.*

(73) *Ibid.*, 66.

(74) *Ibid.*, 65.

(75) *Ibid.*, 66.

(76) Munṭazam, V-159.

(77) *Ibid.*, 160.

(78) *Kāmil*, VIII, 67.

(79) 両者は、四四四(一〇五二)年、Dubays の息子の Manṣūr と、al-Basāsīrī の息子の Abū al-Barakāt の娘とを結婚させ、姻戚関係を結んだ(*Ibid.*, 64)。

(80) *Ibid.*, 67.

(81) *Loc. cit.*

(82) Tā'rīkh Baghdād, IX, 399; Ibn Ḳalānisī, 87.; Muntaẓam, VIII, 163.

(83) 彼は四三七(一〇四五)年に宰相に登用され、(Kāmil, VIII, 42.)、シーア派教徒に厳しかった。(*Ibid.*, 59)また、al-

Basāsīrī と不仲であったことは al-Basāsīrī の「我は国土を荒廃させ、グズの侵入を許し、彼らと書をとり交している Ra'is al-Ru'asā' (Ibn al-Muslima) こそ癪の種なのだ」(*Ibid.*, 68.) という言葉によく表われている。

(84) *Ibid*, 68.
(85) *Loc. cit.*
(86) *Ibid.*, 70.
(87) *Loc., cit.*